

メロン（ハウス半促成・普通・抑制）

栽培歴

月	3	4	5	6	7	8	9	10	11
作型									
半促成	播種	定植	トンネル			収穫			
普通		播種	定植			収穫			
抑制					播種	定植		収穫	

栽培の特徴とポイント

ハウスで栽培するメロンは、贈答用需要や業務用需要に対応した、ネットが全面に発生するアールス系の品種を用いる。ネットを美しく発生させるために、排水性、通気性の良いほ場を選定するとともに、ハウスの外からの雨水の流入を防ぐ。栽培方法は、1本仕立てで、1株1果どりとし、品質の高いメロン生産を目指す。

品種

- アールスロイヤル夏系：適用範囲が広く、半促成作型、普通作型、抑制作型の各作型に適應できる（神田）。果実は1.6kg程度でネットの発現が良い。
- アールスナイト夏系2号：普通作型、抑制の早い作型に適する。ネットはやや粗めだが、盛り上がりがよい。（サカタのタネ）
- アールスナイト春秋系：半促成作型、抑制の遅い作型に適する。カボチャ玉になりやすいので、施肥・水管理に注意する。（サカタのタネ）

育苗管理

1 床土の準備

床土は、病害虫発生のおそれなく、通気性・透水性が良く、適度な肥料を含むものを用いる。使用前に、pH、ECを測定し、適正な値であることを確かめる。

2 育苗床の準備

育苗床は、日当たりの良い場所に設置する。定植前には20cm×20cmに鉢間隔を広げることから、本ほ1a栽培する場合は、育苗床の面積が10㎡必要となる。

3 播種

1a当たり240粒程度の種子を用意し、地床あるいは箱に播種を行う。播種後は5mm～10mm程度に薄く覆土をし、発芽するまで新聞紙等で覆い、乾燥を防ぎ、保温する。

4 鉢上げ

鉢上げは、子葉が開いた直後（播種後7日頃）に、半促成栽培では12cmポットに、普通栽培及び抑制作培では9cmポットに行く。鉢上げ後、活着するまで、軽くかん水を行い、その後は定期的な噴霧（ミスト育

苗)を行い、空気中の湿度が加湿ぎみになるような管理を行う。

5 温度管理

		播 種 床		育 苗 床		
		発芽前	発芽後	鉢上げ後 活着まで	活着後本 葉2枚まで	本葉4枚ま で
気温	昼温		25～30	25	22～25	20～25
	夜温		20	23	18～20	15～16
地温	昼温	28～30	23	25	24	22
	夜温	28～30	23	25	20	20

6 水管理

かん水は、午前中の気温が上がった頃に行い、極端な冷水は避ける。かん水量は、育苗養土が過湿、過乾燥状態にならないように、また、夜間に多湿状態とならないように、土壌の湿り具合を確かめ、天候を考慮して変える。本葉が展開してからは、日中に萎れない程度のかん水とし、根を張らせる。定植に近い苗では、吸水量が増えるので、乾燥しないように注意する。

7 追肥

追肥は、育苗後半、肥効が切れる前に、プロ用ハイポネックス 20-20-20 の 2000 倍（窒素成分で 100ppm 程度）の液肥をかん水の代わりに施用する。

8 ずらし

育苗後半、隣の株と葉が重ならないように鉢間を広げる。

本ば管理

1 ほ場の準備

地下水位が低く、排水が良いほ場を選定する。作付け予定の前年に、堆肥等の有機質資材を施用しておく。定植3週間前までに、石灰を全面散布し、耕起を行う。定植1週間前頃に全層施肥を行い耕起し、条施肥後に畝幅2～2.4mで畝立てを行う。定植3日前までに、十分かん水した後、かん水チューブを設置し、透明のポリマルチを行う。

2 施肥・追肥

施肥量は、窒素成分で 12kg/10a 程度を基本とし、残存している肥料を考慮して増減させる。全量基肥とし、かん水管理により肥効を調整する。ネット形成後に樹勢の低下が見られる場合は、窒素 300ppm(やさい燐加安 S540 の 500 倍)程度の液肥を施用する。

施肥例 (kg/10a)

肥料の種類	総 量	基 肥	施用位置	成 分 量		
				チッソ	リンサン	カリ
完熟堆肥	2,000	2,000	全層			
苦土石灰	150	150	全層			
高度化成		40	全層	5.2	5.2	5.2
有機化成		70	条(畝中)	7.2	7.2	7.2
合計				12.4	12.4	12.4

3 定植

定植は、半促成作型、普通作型では、展開葉数が 3.5～4 枚の頃に、抑制作型では 2.5 枚の頃に行う。栽植密度は、畝幅 2～2.4m×株間 45cm×条間 80cm×2 条とする。

4 温度管理

		生育期	交配期	果実肥大期	成熟期
気温	昼温	28～30	25～30	25～30	25～30
	夜温	15	15 以上	17～18	15

- 1) 生育期：30 以上にならないよう、日中は換気を行う。
- 2) 交配期：受粉促進のため、夜温は、15 以上を確保する。
- 3) 果実肥大期：肥大促進のため、やや高めの管理を行う。
- 4) 成熟期：徐々に夜温を下げ、昼夜の温度差を大きくする。

5 水管理

定植後日数	～ 3	～ 25	～ 30	～ 35	～ 42	～ 50	～ 60	～ 70	～ 90
生育相	活着期	主枝伸長期	結果枝伸長期	交配摘心期	玉肥大期	縦ネット発生期	横ネット発生期	肥大終了期	熟成期
かん水量	多	少	中	少	中	無(少)	中	少	少～無

- 1) 活着期：活着促進のため、十分にかん水を行う。
- 2) 主枝伸長期：根の伸長を促進するため、かん水を控える。
- 3) 結果枝伸長期：結果枝(11節～13節)が1cm程度の頃に、伸長を促進するために少量のかん水を行う。
- 4) 交配期：着果安定のため、かん水を控える。
- 5) 玉肥大期：玉の肥大を促進するためのかん水を行う。ただし、多量に行うと、ネット発生期にも土壌水分が残るので注意する。
- 6) 縦ネット発生期：土壌水分が多いと、ネットが太くなるので、日中に萎れない程度のかん水を行う。
- 7) 横ネット発生期：ネットを多く発生させるために、多めのかん水を行う。また、葉面蒸散を抑制し株の水分圧を高めるために、換気を遅らせて、午前中は多湿条件とする。
- 8) 肥大終了熟成期：果実糖度を上げるために、日中に萎れない程度までかん水を徐々に減らす。果実の肥大が順調であれば、換気に努める。

6 主枝の整枝

主枝1本仕立てとし、10節以下の側枝は早めに摘除する。着果の目標節位は、12節前後とし、樹勢が弱い場合は、2～3節上の節での着果を目指す。

主枝の摘心は、着果節位の上位に10節以上確保した後、行う。摘心により、樹は栄養生長から生殖生長へ転換し、着果が促進されることから、樹勢が強い場合は開花前に摘心を行う。

軒高が高いハウスにおける栽培で、適切に樹勢が維持されている場合は、交配、着果確認後に着果節位の15節より上で、3cm以下の主茎葉の上で摘心すると、大玉で高品質となりやすい。

7 側枝の整枝

11～14節の側枝は、2節を残して、交配前に摘心する。早く摘心すると、2節までの節間が短くなるので注意する。また、側枝が弱い場合、3節で摘心する。

15節以上の側枝は、早めに摘除する。ただし、樹勢が弱く、主枝葉が小さい場合は、側枝葉を1枚確保してから摘心する。

収穫まで樹勢を維持するために、上節位の側枝を2～3本程度残し、生長点を確保する。残した側枝が20～30cmにまで伸長したら、先の部分を摘心し、さらに側枝の発生を促す。

8 交配

11 節～14 節で咲いた両性花で、子房が丸ではなく、やや長めで、花弁より子房が長い、3～4 花の交配を行う。交配は、開花日の朝露がとれた頃から正午にかけて、柱頭を傷つけないように柔らかい毛筆を用いて、両性花を軽くなぜる作業を行う。時々、雄花をなざると、花粉が多く付き、受粉しやすくなる。なお、開花日は、収穫日の目安となるので記録しておく。

9 摘果

着果した果実の中から、やや縦長で、花痕が小さく、傷のないものを 1 果選んで、他は除去する。果実を選ぶ時期は、適正な樹勢の時は鶏卵大の時に、樹勢が弱いときは着果確認後の早い時期に、樹勢が強い場合は、野球ボールの頃に行い、樹勢をコントロールする。

10 玉つり

玉つりは、摘果後早めに、結果枝が水平になるように、結果枝をつり上げる。肥大すると果実が下がってくることがあるので、結果枝が水平になるようにつり直す。

11 収穫

収穫適期が近くなると、結果枝葉の葉脈間が黄化する場合があるが、品種や栽培条件で発生状況が異なるので、この症状を収穫の目安として用いる場合は注意する。

収穫は、開花後 53～60 日頃で、収穫前に 2～3 個の試し切りを行い、糖度が十分あることを確認した後にを行う。

病害虫防除

- べ と 病 : 梅雨期以降に発生しやすい。発生初期までの防除を徹底し、発病が見られたら、被害茎葉は適切に処分する。
- う ど ん こ 病 : 高温下で多湿と乾燥が繰り返す条件下で発生しやすくなる。品種に抵抗性が付与されているが、完全ではないので、発生初期までの防除を徹底する。
- アブラムシ類 : 5月頃から発生が見られることから、定植期からの防除を徹底する。
- ハダニ類 : 高温、乾燥時に発生が多い。発生初期を見過ごさないよう注意する。
- ワタヘリクロノメイガ : 6月頃から発生し、抑制作型で被害が多くなる。葉裏から食害するので見過ごさないよう注意する。
- アザミウマ類 : 幼果時に被害を受けることから、開花期からの防除を徹底する。

販売のポイント

品質保持期間は、10 で 2 週間、20 で 1 週間が目安となる。そのため、消費者までの流通期間を考慮した保存を行う必要がある。